

『東方』二九四号より

「決まり手」は押し出し

白井啓介(文教大学・於北京)

前口上

瀬戸宏著『中国話劇成立史研究』が上梓された。すでに三月に刊行されたが、これについて一言評せとの編集部のお誘いが来た。そして著者の瀬戸宏氏自身も、私が書評を書くことを望んでいるとのこと。よし、そういうことなら、このケンカ買つてやるとばかりに引き受けたのは良いが、何しろ三月末から北京の日本学研究センターに赴任することとなり、旅支度の中に、この本だけはと放り込んだものの、なかなか思うように時間が取れない。そんな中で、ともかくにも、瀬戸氏のこの大業績に対し、畏敬の念を込めて一筆啓上することとする。

第一幕 ねらいと構成

そもそもこの書は、「中国話劇成立史研究であつて中国話劇成立史ではない」(まえがき)と言う。つまり、「話劇の確立に至る演劇史をまんべんなく記述することを目的とはしていない。話劇の成立を考察するうえで私が重要と考えた演劇事象をいくつか抽出して、検討したものである」(同)。

そこで瀬戸氏の取り上げる対象は、「実際に上演された舞台芸術——演劇であり、日本語の戯曲——劇文学そのものではない」(同)とする。さらに「実際に上演された舞台は上演終了とともに消え去ってしまうから客観的な研究対象にはできず、演劇の研究対象はあくまで劇文学だという

瀬戸宏著

『中国話劇成立史研究』

A 6判・五六八頁・東方書店・一四、七〇〇円



意見」(同)に対しては、次のように反駁する。「劇文学が演劇研究の唯一の対象であるなら、(中略)近現代演劇においても、演技、舞台技術、演出、観客、興行形態など劇文学研究では解けない問題も多く、しかもこれらの中に近現代に固有の問題が反映されていることが少なくない」(同)と。

それでは、本書の内容を詳細に知るため、構成に目を向けてみる。

まえがき

第一部 文明戯の諸問題

第一章 晩清の演劇改良運動と学生演劇

第二章 前期春柳社

——文明戯の創始・発展期Ⅰ

第三章 進化団と文明戯の確立

——文明戯の創始・発展期Ⅱ

- ▼ 『東方』294号より
- 一 「決まり手」は押し出し
- ▲ 白井 啓介

クリックすると次の段にジャンプします。

第四章 新民社と民鳴社

——文明戲の最盛期Ⅰ

第五章 六大劇団聯合演劇の考察

——文明戲の最盛期Ⅱ

第六章 新劇同志会(後期春柳社)

——文明戲の最盛期Ⅲ

第七章 文明戲の衰退期と文明戲の歴史的位置

附章 文明戲(中国早期話劇) 研究の最近の動向

——袁国興と黄愛華を中心に

第二部 話劇の成立

第八章 『新青年』とイブセン

——新文化運動と演劇Ⅰ

第九章 『新青年』演劇改良特集と胡適『終身大事』

——新文化運動と演劇Ⅱ

第十章 上海新舞台での『ウォーレン夫人の職業』上演をめぐって

第十一章 民衆戲劇社『戲劇』と自由劇場運動

第十二章 陳大悲と人芸戲劇専門学校

第十三章 上海戲劇協社『若奥様の扇』上演

——話劇の確立

終章 話劇の位置

附属論文・資料

近代劇とは何か

書評——田仲一成『中国演劇史』

書評——金海南『水戸黄門「漫遊」考』

清末小説研究の貴重な成果

——樽本照雄『清末小説論集』書評

俳優と権力者の京劇史——加藤徹『京劇』の記述方法 進化団新新舞台上演演目一覧

トップページにもどる

『申報』掲載文明戲劇評目録

参考文献／初出一覧／あとがき／索引

第二幕 文明戲と話劇

この内容を眺めると、本書は、二〇世紀初頭の「文明戲」誕生から、辛亥革命を経て文明戲が隆盛から衰退に到り、五四運動を契機に新しく「話劇」と呼ばれる演劇運動が成立するまでの形成過程の詳論であることが分かる。瀬戸氏は、これを通説に依拠して第一部「文明戲の諸問題」と第二部「話劇の成立」とに分けて詳述する。従来の中国演劇研究では、別の位相に属するものと扱われてきたが、それは日本經由の「文明戲」と、五四運動以降の欧米系の「愛美劇」とに、質的な相違を見出そうとするからだ。これに対して瀬戸氏は、「文明戲と五四以後の話劇の成立過程を同一論文の中で同じ比重で扱ったこと」(あとがき)に本書の特徴があると言う。なるほどこの両期を等分に論じることは必要なことだ。だが、瀬戸氏は「劇文学研究は本書の中で副次的な位置しか与えられていない」(まえがき)として、極端に作品論を忌避する。話劇が「運動」として語られるだけでなく、娯楽文化、ショー・ビジネスに到るためには、やはり作品そのものが問われるはずではないか。第十三章で『若奥様の扇』の上演によって話劇が「確立」したと論ずるが、作品が受け入れられた理由の一つとして、この作品の巧妙な仕掛けが功を奏したことも、作品分析によってこそ可能なのだと私は思うのだが。

私としては、一九二〇年代に入って、中国製「話劇」が創作されるに到るまで、つまり瀬戸氏が言う「劇文学」としての創作力が高まっていくところまでは範囲とすべきではないかと考える。その点は、しかし、やはり見解の相違な

のだろうか。第一部も第二部も、上演形式が問題であることは瀬戸氏の所論の通りだが、瀬戸氏が探究された「話劇確立」までの過程と、劇文学誕生以降との間に、むしろ超えるべき断層があるのではないかと思える。その点は、本書が明らかにした、副次的な新たな視点と言えようか。

瀬戸氏が言う「本書は私の中国演劇研究の一定の到達点ではあるが、終点ではない」（あとがき）を信じて敢えて言うと、今後は、ぜひとも劇文学研究を忌避することなく、田漢、歐陽予倩、洪深らの戯曲作品に対する分析と考察にも進んでもらいたい。

個別の疑問として、春柳社の連続と非連続について、やや不鮮明な扱いが気になる。第六章新劇同志会（後期春柳社）では、新劇同志会を「後期春柳社」と同類に括しているが、一方瀬戸氏は従来、新劇同志会と春柳劇場とは別の演劇団体とする見解をとっていたのではなかったか。この点に関しては、すでに鈴木直子氏が「民国元年における新劇同志会の演劇活動」（『中国文化』第六三号、二〇〇五年六月）で指摘しているところだ。

第三幕 北京詣で

知る人ぞ知るところだが、「私の調査によりますと……」という瀬戸氏の口頭禪が、本書を手に行っていると耳元に甦る。確かに、本書がなるについては、春柳社や民鳴社、新民社等の文明新戯の上演演目の調査がその基盤にあることは疑いを容れない。結婚する際に、「中国に自由に行かせること」（あとがき）という破天荒な条件（そもそも条件を出せる立場かとの疑念もあるが）を付けてまで、彼はひたすら中国へ出かけた。そこで何をしたらと言え、北京図書館（後に国家図書館）で『申報』所載の芝居上演広告

トップページにもどる

を調べ続けた。瀬戸氏が調査した民国初期は、旧正月の一週間ほどを除いて毎日新聞が出ている。辛亥前後から数えて三十年分くらい（あるいは彼のことだから四十年分か）だろうが、それでも毎日掲載される上演広告は膨大な量になる。それを彼は、こともあろうにノートに書き写した。一日に調べられる分量は、復刻版で二冊（大体半年分）から三冊くらいだろうか。少し知恵を働かせる人間なら、携帯コピー機で必要な部分のみコピーしようとか、デジカメに撮ろうとか、何とか方法を講ずるものだ。だが、瀬戸氏はあたかも現代の「活愚公」のように「愚行」を行った。だが、この調査を成し遂げたことが、かれの微動だにしない自信を裏付けることは、本人も否定すまい。もともと、何も中国に行かずとも、日本国内にも『申報』の復刻版くらいあるのだが、そこはまあ、こだわりの世界というものだろうか。

第四幕 「演出文化」として

私と瀬戸氏とは、もう三十年来の付き合いになる。当初は研究対象が近かった縁によるが、その後私は、彼が反駁する劇文学として文明戯から話劇作品を探究した後、作品そのものを検証できる点に惹かれて初期の映画作品とその社会的位相に関心を傾けることになった。昨年、北京で開催された「中日文明戯学術研討会」では、瀬戸氏と飯塚容氏が日本側世話役を務め、私も初期映画と文明戯の演技様式についての試論を披露した。その場で、瀬戸氏の学問とは、「学風」とまでは言わないが、現在では「学路」が異なることを再確認したのだった。瀬戸氏の研究手法は、「まえがき」に述べる通り、劇文学研究ではなく、上演を含めた、実際に演じられた演劇を対象とする。もちろん、私の映画研究であっても、映画館の営業形態、興行体制、広告等を

考察の対象とするが、やはり実際に上演された作品が出発点ではないか、と私は依然として考える。お互いの「学路」は異なるが、中国の「演出文化」の草創期を探究する点では、依然として「同志」と言えるかも知れない。

終幕 あと一簣

最後に注文を一つ。構成でも明らかな通り、本書には「本文と関係の深い論文・書評・資料を付属論文・資料として収録」（あとがき）している。それぞれは、確かに独自の知見が示されているものの、やはりどうしても違和感を免れない。この中でありがたい資料としては、最後の二篇に尽きる。むしろ、先に挙げた口頭禅に出る「申報所載春柳社上演広告」（これは細切れで分載されたので、一括して収録して欲しかった）や「民鳴社上演演目一覧」「新民社上演演目一覧」等こそ、「附録」としての収録が期待されたところだ。もちろん、頁数の制約等諸般の事情があり、著者の意図が貫徹しがたかったのかも知れない。その点が、「九切の功」を欠くとまでは言わないが、あと「一簣」と感じさせるところだ。

もちろん、「参考文献」は、現在の望みうる限りの関係文献目録となっているから、この点では異を唱える余地はない。

エピソード

相撲の押し出しは、基本中の基本であり、意地悪な言い方をすれば何の変哲もなく、華麗な技とは縁遠い。しかし、横綱相撲としては奇策を採らず押し出しで行くことが、王道と言える。瀬戸氏の著書は、新奇な理論に吸い寄せられることなく、あざとい技を繰り出すでもない。まさ

▶ トップページにもどる

に王道を、ひたすらコツコツ積み上げていった結晶であろう。その点では、素人受けする派手な見栄えはないが、まさに王道を歩んでいる。今後、中国の近現代演劇の研究に足を踏み入れる若き研究者諸氏は、まずもって本書を繙かねばなるまい。そして、この王道を行く横綱の胸にぶつかって、自らの技量を高めるべく研鑽に励むことになるだろう。